

普及活動情勢報告（平成 30 年 4 月分）

中央東農業振興センター嶺北農業改良普及所

収量・品質向上にむけ栽培管理を徹底しよう ～JA土佐れいほくカラーピーマン部会勉強会～



熱心に勉強する部会員

3月19日、JA土佐れいほくカラーピーマン部会は、JA本所で勉強会を開催し、16人の生産者が参加しました。

普及所からは、定植前後の管理や土壌還元消毒による病害防除について説明しました。参加者からは、「主枝主体に収穫する誘引方法を現地で詳しく知りたい」という声がありました。

今後、普及所はJAと連携して、増収にむけた草勢維持や誘引方法を徹底するため指導していきます。

平成30年度シシトウ栽培にむけて早めの準備を ～栽培講習会を開催～



真剣に耳を傾ける部会員

3月27日、JA土佐れいほく園芸部シシトウ部会は、JA本所、同大田口支所で栽培講習会を開催し、20人が参加しました。

普及所は定植前後の栽培管理（基肥施用、支柱の設置など）、本年度から取り組む県版GAPについて説明しました。

部会員からは、「昨年の夜間は、低温となって活着が良くなかったので、初期生育が悪い時の対処方法を教えて欲しい」「GAPの点検シートは項目が多くて大変だが、食品を扱っている以上必要だ」といった声が出されました。

普及所は、生育初期の灌水・施肥管理、温度管理を指導するとともに、GAPの取組について部会員の意識が向上するよう支援していきます。

地域の担い手として ～(株)れいほく未来との打合せ～



栽培等の対応策を協議中

4月4日、普及所で(株)れいほく未来職員1人、JA職員1人、普及所職員6人が(株)れいほく未来の園芸事業や情報発信等について協議しました。

米ナス、パプリカを中心とした雨よけ（ハウス）栽培の計画と状況を確認する中で、「天敵の活用に関する研修生の理解が不十分」「共同作業による作業の効率化はこれから」等の課題が明らかになりました。

また、(株)れいほく未来が地域の担い手として認識されるよう、継続的にJAの広報に情報発信していくことになりました。

普及所は、今後も(株)れいほく未来が地域を支える担い手となるよう支援していきます。

H30年度の作付計画を共有 ～第1回クルベジ定例会の開催～



本年度最初の定例会

4月5日、大豊町農業センターにおいて、(株)大豊ゆとりファーム職員5人と普及所3人が参加し、H30年度の作付計画と現在の栽培状況について確認しました。

普及所からは、雨よけ栽培は場での緑肥栽培による除塩と有機物の施用効果について情報提供し、緑肥作物による土壌改善について提案しました。

H29年度からクルベジ定例会で栽培計画の検討を重ねたことで、今年度は収益性を考えて栽培品目が集約され、作業も計画的に進められています。

今後も2か月ごとに定例会を開催し、計画的な栽培、目標とする収量が確保できるよう支援していきます。

青果ユズ拡大生産にむけて ～病虫害防除技術研修～



研修の様子

4月5日、普及所会議室で本年度から青果生産に取り組む3人を含む5人を対象に、病虫害防除技術研修を行いました。

研修では被害の実態や主な病虫害の見分け方、園地の排水対策や被害枝葉の除去等の予防対策、どの農薬を、どのタイミングで、どう散布すれば効果的に防除できるのかについて説明しました。

無農薬の酢玉生産から、初めて青果生産に取り組む農家は「防除暦どおりに管理し、青果が儲かることを近所の人に伝えたい」と話し、研修資料を持ち帰りました。

ユズの補完品目であるゼンマイの収穫が始まり、参加者は予定の半分でしたが、今後に期待の持てる研修となりました。

JA営農指導員と指導体制やGAPの推進について協議



「GAP 通信」を確認する
営農指導員

4月9日、JA本所でJA土佐れいほく営農指導員と普及所が組織する営農連絡会を開催し、平成30年度の指導体制等について協議しました。

普及所からはGAPの理解を深めるために生産者にむけて「GAP通信」を発行し、優良事例を紹介することなどを提案し、了承されました。

参加者から「作付け前の点検結果では、生産者間の意識差が見られる。問題点を指摘するのではなく、生産者に気づいてもらうことが大切」という意見が出されました。

普及所ではGAPに対する理解が進み、取組が生産者のメリットにつながるよう支援します。

甘長トウガラシの栽培管理指導を実施



栽培管理について指導中

4月10日、新たに甘長トウガラシの栽培を開始する大豊町と土佐町の生産者のほ場で、定植前後の管理について指導しました。

甘長トウガラシは嶺北地域の有望品目として期待されており、今年度から新たに3人の生産者が栽培を始めています。

生産者からは、粒剤の施用方法等の質問が出され、甘長トウガラシ栽培にむけて意欲を燃やしていました。

今後、JAと協力して研修会の開催や巡回指導を行い、生産者の栽培への理解が深まるよう、支援していきます。

今シーズンの花き出荷にむけて ～花き部会が現地検討会を開催～



栽培状況を確認するメンバー

4月12日、JA土佐れいほく花卉部会は、現地検討会を開催し、部会員4戸（8人）が参加しました。現地検討会では、オリジナルユリ品種‘ノーブル’やトルコギキョウ等の栽培ほ場を巡回し、意見交換を行いました。

普及所からは、本年度実施予定の実証ほの設置計画について説明し、‘ノーブル’の振興にむけて産地ビジョンの作成を提案しました。

農家からは「‘ノーブル’には、数種の新品種があるが、限られた栽培面積の中で、消費地が求める品種を安定的に出荷していくことが重要である。今後、品種構成や球根の確保方法等の方向性を部会内で協議していきたい」などの声が聞かれました。

普及所では、‘ノーブル’の産地ビジョン作成を支援するなど、産地の維持・発展にむけ活動していきます。